

# 予防はその何倍もの治療にまさる

キャサリン・ブルンナー



キャサリン・ブルンナーは、メリーランド州、バルティモア公立学校の早期入学許可プロジェクトの企画委員である。バルティモア市公立学校連盟とフォード基金との協力により、一九六二年にはじめられた四歳児の実験計画について述べている。

目のくりくりした四歳のアーネットは、お人形をだいてゆり椅子にすわり、椅子をゆらしながら内緒話をするようにお人形の耳のそばでひっきりなしにおしゃべりをしていた。突然アーネットは椅子をゆらすのをやめた。椅子からとび上がり、次々に、ほとばしり出るように話しかけながら、教師の方にかけて出した。「この赤ん坊が何をしたのか知ってる？ お父さんが出掛ける時にドアをあけっぱなしだったの。そしたらこの赤ん坊は外にとび出して行っちゃったの。雨がふってたのに。あたしずっといろんな所をさがしたの。だけど、どっかへ行っちゃってみつからなかったの。雨はどんどん降ってたの。どこでこの赤ん坊をみつけたと思

う？ フォスター通りよ！ 道路に出たのよ！ 道のまん中だよ！ だからあたしは『道路にいたらあぶないよ』っておしりをたたいてやったの。男の子がね、フォスター通りで車にぶつかったの。道のまん中だよ！ それでね、その子を病院につれていくのに救急車が来たの。その子ひどく怪我してたのよ。この赤ん坊は悪い子ね。だからあたし、もう通りに出ちゃいけません』っておしりをぶってやったわ。」

アーネットの話すそぶりやしぐさは、彼女の話が実際にあった出来事によるといふのを明らかに指摘している。この話は彼女自

身が経験した事実にもとづくものかもしれない。ドアが開けっぱなしで、子どもが家から外にフラフラ出て行く。子どもの事故、これらはたてこんだ都会の下層階級に属するアーネットの住む地域の一面であろう。貧困な環境・多すぎる人間・最低生活を獲得するために夢中で、目前のことにしか関心を示さぬこのような地域では経験の範囲・機会が限定されてしまう。

下層階級の生活状況は、数多くの問題をひきおこす原因である。ひとつは学習の妨害である。都市の住民が学習問題を克服できるように、教育者は関心を示し、特別の計画・教育変革・教材の改善・現職教員の教育・成人の技術向上援助計画などに努力している。数都市で幼児の教育計画のうち問題の予防計画に興味を集中した。これは、個々の可能性を十分に生かし学習に耐え得る教育上の発達の素地を向上させるような経験を提供する計画である。

アーネットは、バルティモア市立学校での経験教育計画である早期入学許可プロジェクトに参加している子である。これは学校への早期入学がこの地域で環境の圧迫の中で学習する際の障害を克服するものか否かを判定するための試みであり、一九六二年秋に公立学校長ジョージ・B・ブラインにより創立され、経費はバルティモア市立学校とフォード基金で共同負担している。

早期入学許可プロジェクトは無償の教育奉仕を必要とする環境

の四歳の子どもたちに、より豊かな生活をさせようとする教育計画である。その研究計画は、次のことを究明することである。

・自己統制以外の環境要因により、発達が遅滞している子どもたちの発達を促進する。

・教育価値に関する両親の理解を深め、自分の子どもの教育の責任を両親に痛感させる。

・下層階級の親子の抱負を向上させ、能力段階の改善を援助する。また、学校と地域団体が提携する際の相互伝達を助長する。

早期入学許可プロジェクトの評価のための研究は、研究主事オランダ・F・フルノーの指導のもとに行なわれた。長期間の効果と同様短期間の効果をも測定すべく幅広い研究がなされた。

アーネットは一九六三年二月から、他の三二七人と肯定的態度の発達・知識の拡大・効果的学習の技術習得などの趣旨の種々の経験に参加している。バルティモア市下層階級地域の四小学校にある四つの早期入学許可プロジェクトの実験学級は約三十四年の歴史をもっている。各グループ毎に二人の教師と、定期的に援助する職員一人がいる。二つのセンターでは、子どもたちは午前中のみくるようにし、午後は教師と両親との仕事や、現職教員の教育にあてられている。他の二つのセンターは子どもたちのために午後まで保育を行なった。二つの組織形態は、個々の価値を調査

するための実験として行なったものである。

#### 四歳で入学したら子どもにどんなことが起こるか。

一、子どもたちは、自分がだれであるか、また自分には何ができるかを学びはじめる。

子どもたちが自分についてどう感じるか、また設定された状態で成功する能力についてどう感じるかは成就と重要な関連がある。従って肯定的自己概念の発達は早期入学許可プロジェクトの重要な目的である。自己概念の一観点は自己同一視である。この計画のためはじめて学校にきた子どもの中には、自分の名前を知らない子が多い。その子たちは家庭ではいつも「おにいちゃん」とか「おねえちゃん」とか呼ばれていた。また近所に移転が多かったり、家族が何か所に短期間きり住まない場合には、子どもたちは「坊や」とか「おちびさん」とかいわれて、名前と呼ばれるようなことはなかった。子どもたちは自分の本当の名前に全然似ていない呼び名に答えるようになってしまい、時には家庭内での伝達には、全然名前を必要としないこともある。子どもを家の中に入れた時、母親は子どもの方をにらみつけ、「ここにはいつてきな」と命令するであろう。母親の表情と行動と命令が混合して名前を必要とせずに各々の子に意味を伝える。

学校では子どもたちはそれぞれの名前で、朝、あいさつされ、個人的に話したい時に名前前で表現される。子どもの製作品はそれ

を作った子のものであることを明らかにするようにはっきり名前をはりつけられる。自分の持ち物を置く場所は、個人のものであることが強調されて、名前がつけられている。

子どもたちはあまり鏡や写真で自分を見たことがないので、自分がどのように見えるかわからない。どのセンターにも鏡があるから子どもたちは身体的容姿に気づくようになってくる。また自分自身の写真、スライド映画は、子どもたちの自己承認を強めるとともに、子どもたちが参加した経験を思い出す手助けになる。

このような方法で子どもたちに自分はだれで、どんなふうに見えるかを気づかせようと援助する。この間に個々の子どもは友だち関係の中で常に成長していく。子どもは一緒に遊ぶ友だちの声や表情、自分が話す時の友だちの注目のしかた、特定の状態で自分が答えた時の友だちの反応などから、自分自身のことを学ぶのである。もしも彼の自己概念が肯定的であれば、子どもが自分の興味を表現し、自分の考えを確かめてみ、自分の感情を自由に表現でき、成功感を体験すると共に失敗に打ち勝つことも学べるようなふんいきが大切である。早期入学許可プロジェクトの職員はこのようなふんいきを作ろうとしている。

自己概念の発達過程は、前進しつつあり、子どもの環境の各面の人や出来事に影響されるものであり、自己概念の確立は教育計画と両親教育の種々の面が総合されたものである。

## 二、自分自身および持ち物を大切にすることに責任を負うことを学ぶ。

子どもたちの多くのプロジェクトは、無秩序な、時には安全を確保しにくいようなきちんとしていない環境からくる。自分の面倒をみることで個々の所有物に関することが、子どもと両親と一緒に働くために必要な関心事になる。

石鹼、タオル、ちり紙、その他身のまわりを清潔に保つための品物は学校で準備してある。これらの品物は、それが何であり、なぜ重要か、どのように使うか、どこにしまっておくか、どのように管理するかなど教師と話し合えるような少人数のグループで子どもたちに紹介される。

教室ではそれぞれの物をしまっておく場所があり、子どもたちは教師にそれらをどの戸棚に置いたらよいか決めるのに意見を述べる。クレヨンやパズルなどの置き場所は絵で示されていて、子どもたちが使い終えた時に正しい置き場にもどせるよう配慮されている。

教材、教具などの置き場所は、教師の助力がなくなるとも、子どもたちが一日中いつでも使いたい時に選んで使用し、またもどせるよう低くて手の届きやすい所にする。控え目にはじめることが家にほとんど何も持っていない子を圧倒するという事態を予防する。成長と興味に適した教材が年間で追加される。

## 三、自分の身心を上手に処理することを学ぶ。

遊具や活動は子どもたちに、歩く・走る・躍ぶ・登る・這うという種々の行動の機会を与え、筋肉を発達させ、四歳児の余分なエネルギーの調整や発散の場を提供する。

また、ごっこ遊びや教材は、新しい考えを試してみたり、感情を表出し、不安を少なくする機会をも与える。

## 四、より効果的にコミュニケーションすることを学ぶ。

ほとんどの文献では学習問題に関係して都会の子どもたちはあまり言語的ではないことが指摘されている。アーネットの話は都会の子どもたちがどんな経験をしているかを例証している。その経験が自分に印象的な時には最も言語活動が活発になるが、幼児のすべてがそうであるように、もっと言語習慣を習得する必要性を現わしている。にもかかわらず、子どもは自分から言語表現し、思っていることを伝達できる。その結果、他人に表現する思考・表現のための言葉・自分を友だちや聞いている人に理解してもらえる思考を組織化する能力を与える教育計画の必要性が強調され、伝達各面が早期入学許可プロジェクトにおりこまれていく。

子どもは率先的な経験に密接な真のまたは代理の追加経験により強められた豊富な体験に参加する。道路横断に最適の場所はどこか、学校の近くをどんな車が通るか、友だちはどこに住んでい

るか、なぜ近所にたくさん種類の建物があるかなどを学ぶために近隣地域を歩き、見学する。

農場・空港・小鳥屋・公園・動物園などへの地域外の旅行計画もされるが、消防車が学校の前を通る時・窓ガラスに雨が強くふりつける時・ジェロームが窓の敷居に小鳥がとまるのを見ている時などの身近な経験はいつでも起こる。個々の経験は伝達のための素材を提供する。それに関して子どもたちは物・感情・動作などを正確にあげ、それらを説明する言葉を習う。

概念と言葉の意味は、概念が言葉により同一視されるということからも相互関連がある。例えば、『速い』『遅い』を理解し学ばせようとする時、人と車の動きを観察し、動きと距離により対照させ、理解度をテストするためには劇を使うことができる。言葉づかいは練習の機会あるごとに応用するといふ。

回想と思考構成はより効果的に伝達できるようにし、伝達に答えられるようにする。子どもたちは、テープレコーダー・レコーダー・絵を用いて出来事や経験・話・詩歌などを回想する。時に、これらの出来事は、適当な順序を保持するために整理される必要がある。

五人や十人のグループで思考を伝達することのできない子どもたちは、大きいグループの活動に参加できる自信ができるまで、一対一から、二、三人の小グループでの機会を与えられている。

五、子どもたちは、文学・芸術・音楽の喜び、美を経験する機会を持つ。

どんな人でも、あらゆる場所を訪ね、すべての風景を心にとめ、興味あること・喜び・悲しみを全部経験したりするというように生活のすべての経験をするのは困難である。しかし、本を通してなら、各方面に視野を広めることもできるし、豊富な経験や知識を得ることもできる。喜び・興奮・情緒の源として本に接した時、子どもの知的・感情的・社会的視野は大きく展開することが期待できる。

童謡・詩・昔話・現実的話・実際の素材は子どもたちと分かちあい、その反応は批評、話の反復・劇遊び・芸術的表現から知ることが出来る。本での経験は読むことの学習への興味、よい文学への愛を養い、本が提供する情報に創意的に気づくことの刺激になることが望まれる。

種々の絵画製作材料を使用することは、子どもに思考や感情を表現するもう一つの機会を与える。特に言語で自己表現することが難しい子たちにはよい機会である。子どもたちは物を媒介として試す機会があるから、それを解釈する考えは、現実のまたはそれに代わる経験から得られる。行動や感情を代弁する歌やリズム表現、楽器演奏は、知識や技術の取得と同時に自己表現の場でもある。

#### 六、自分の住む世界への認識を發展させる機会がある。

困窮地帯からの子は、概念發達の障害、遲滞をひきおこす環境要因の中に住んでいる。貧困のため手に入れられる品が減らされ、視覚的にできえも幅広く種々の対称物を見る経験が不可能になる。ある子は外出の衣服がないためや、大通りで災害にあうことへの不安からほとんど一日中薄暗い混雑した家の中で過ごすことがある。それ故経験はかなり限定されている。家庭に読み物の数は少なく、または全然ないため、本を通して経験する可能性も少なくなる。どんな方法を通してでも、全然経験したことのないことは話したり理解したりしにくい。周囲の物を指示するため、大人も時々漠然としてわけのわからない言葉を使うから、子どもたちは周囲の物、人の正しい名前に接することをしない。例えば、子どもの椅子の下に靴を置かせたい母親は、「それをそこに置きなよ」というであろう。数多くの親たちは、子どもと一緒に過ごす時間が少ないため、子どもたちがどのようにして学んでいるか知らない。従って子どもたちが周囲の各方面に気づくよう手助けしない。環境的に虚弱な子が学校で学習する場に直面した時に、教師の話すことがほとんど理解できないために困難を経験す。彼らの言語能力は非常に限られており、教師にわかりやすいものでも、それぞれの場で反応することが不可能になることがある。学習情況での概念は真新しいものであり、内容は無意味なものである。自己表現できる正確な概念と言語の發達を助長する経

験を提供することは重要なことである。

もしも質問し、問題の原因を探究し、考えを試してみ、関係について調べられるよう励ましがあれば、日常茶飯事ですら子どもたちに環境の正しい理解を發達させる機会になる。

ある日、子どもたちが学習時間の後で片づけをしていたら、小使いさんが二つの大きな包みを教室に運んできた。好奇心の強い子どもたちはすばやく、この不思議な包みをとりかこみ質問を連発した。「何だろうこれ?」「いつになったらこの包み紙をはずせるんだろうなあ」「何がはいってるのかしら?」「教師と子どもたちが包み紙をはずしてみると、穴だらけの大きな板があった。子どもたちは持ち上げてみて重いことに気づいた。』どうしてこの板穴だらけなの?」「穴の中に何入れんの?」「この板どうするの?』と再び質問が投げられた。小さい方の包みを開いて、その中に割れ目のあるブロックを發見した。その板は割れ目にぴったり合い立つことに気づいた。他の小さい箱に金属の鉤と針金がいっているのをみつけた。鉤を調べてみて、子どもたちは穴へのどめ方を發見した。「そうだ、この鉤に物をかけられるんだよ!」とじっと見ていた子がいった。どんな物をきげられるのかと洋服・人形の服・楽器などをためしてみた。そして穴だらけのこの板は品物を片づけておくための板であることがわかった。

子どもたちが学習過程に活発に参加するに従い、大きさ・色・形・機能などの概念を形成するようになってくる。概念は個々が理解を広げ、知識を組織化し、新しい場面に適用し、新しい考えを容易に理解できるようにする。

#### 七、子どもたちは数量的関係を理解しはじめる。

自転車が何台あるか。同時に何人の子どもが乗れるか。いくつのピースでひもがいつぱいになるか。だれが一番背が高いか。トマスより背が低いのはだれか。ポストへ行くのに近道はどこか。箱を作るのに積木がいくついるか。

このような事柄を考えながら、数量に関する言語・思考関係が、子どもたちに意味を持つようになってくる。

#### 八、子どもたちは個人として、グループとしての両方の努力に満足を感じる。

生活を通して、子どもたちは目標に向かつてのひとりでの活動をグループでの仕事に役立つように組織化し、それから満足感をひき出す必要がある。小さい子どもたちは見聞きする時間と、自分の選択で自分のペースでそれらを考え、材料を試してみる時間が必要である。また同時に、友だちと一緒に使ったり、一定時間順番を待ったり、一つの仕事を友だちと協力して一緒になしとげる機会も必要である。早期入学許可プロジェクトは、子どもた

ちに個々の興味と発達を助長し、グループでの技術を発達させるという種々のチャンスがある。

#### 両親教育の計画はどんなものか

早期入学許可プロジェクトは、両親が教育の価値を理解することの重要性を認め、両親が子どもへの教育に責任を自覚できるよう尽力している。両親活動は形式化されていないが、両親が意義を認めるよう意図している。グループ活動は教師が家庭訪問の際に受けた質問や、日頃の話し合いでの問題と同じ関心をもとにしてゐる。両親との活動は次のように発展した。

- ・教師と親が学校のはじまりか終りに、子どもの向上に関して個人的に話し合う。
  - ・家庭訪問により教師と親との親しみを増し、子どもの成長した環境を理解する。
  - ・教師と両親の、学校での研究会。
  - ・親たちが子どもの活動を見学しに学校を訪問する。
  - ・親が子どもの旅行に同伴する。旅行はある親には新しい経験であり、近隣の設備などで今まで気づかなかったことに目を向けさせる動機を盛り込んでいる。
  - ・親たちは種々の技術を学ぶグループ集会に参加する。
- 予防的教育計画としての、早期入学許可プロジェクトは、どの程度の意図を達成したか。

時間と縦の研究がその解答を与える。実験グループの子どもたちは、

・引き続き幼稚園に入園するため、早くから連続教育を経験する。

・不適応問題を取り去り、言語能力が向上し、グループ参加の技術が発達し、独立心が認められた状態であり、幼稚園生活を、明らかにスムーズに始められる。

・小学校に定期的に出席する。

・発達の素地測定の際、好成績を示す。

・読書開始がスムーズである。

早期入学許可プロジェクトの職員たちは、何倍もの治療よりも、子どもたちに実際経験させることを援助していると確信している。しかし四歳一年間の教育経験は、後においてのよい開始をはかどらせたにすぎない。子どもの教育は各分野で継続し協同で努力すべきものである。実験計画は必要な部分に注目し、必要なものへの答を提供する。両親と教師が共同して子どもたちの目標達成を助力する時、より完全な解答が展開される。はじめの意味での予防は、アーネットたちの早期入学許可プロジェクトの参加者たちに適用された。現在私どもが直面している問題は効果的予防法を決定し応用することにより、アーネットや他の子たちが後で何倍もの治療の必要がないようにすることである。

(茨城県 小友幼稚園・福西百合訳)

子どもたちは生活の中で学ぶ

もしも子どもが批判とともに住むならば

彼は人を責めることを学ぶであろう

もしも子どもが敵意とともに住むならば

彼は争うことを学ぶであろう

もしも子どもが嘲笑とともに住むならば

彼は恥ずかしがることを学ぶであろう

もしも子どもが寛容とともに住むならば

彼は忍耐を学ぶであろう

もしも子どもが奨励とともに住むならば

彼は自信を学ぶであろう

もしも子どもが賞賛とともに住むならば

彼は真の理解を学ぶであろう

もしも子どもが公平とともに住むならば

彼は正義を学ぶであろう

もしも子どもが安定感とともに住むならば

彼は誠実を学ぶであろう

もしも子どもが承認とともに住むならば

彼は自分自身を好むことを学ぶであろう

もしも子どもが受容と友情とともに住むならば

彼は世界の中に愛を見出すことを学ぶであろう

——作者不明——